



同志社人物誌 (31)

長谷場知亀
はせ ばち き

中嶋静恵

◇ はじめに

名もなく功もない老女のことを、この激しい時代になぜわざわざ書くのかと問われたら、正直いってためらわざるを得ない。しかし私はやっぱり書きたい。彼女は彼女なりに同志社の過去の歴史の一駒をいっしょうけんめいに演じて来たのだから。それがあわれと

思えるから。

◇ 生い立ちと遊学

チキ(後になって知亀の字を用いるようになる)は熊本県八代郡鏡町で、機織りを業として来た浜田家に、義路、タチを両親として、一八七〇年九月二十五日に生まれている。この家がかねて徳富家と親しく、後にチ

キの六歳上の兄康喜と健二郎は英学校で、ともに教師をしていたことがあるという。(展望126号・中野好夫「芦花・徳富健二郎」より)チキが十歳の秋十一月に新島襄が八代を訪れ、その地の代陽小学校で演説をしているが、おそらくこの兄妹は、徳富家がかねてから聞かされていた新島襄を見たいと手を取りあって出かけて行き、そこで新島襄を見るとともに、キリスト教というものもおぼろげながら知ったのではかるうか。

十八歳のチキが、長崎(または博多)から神戸(または大阪)まで長い船旅をして京都の同志社女学校にやって来たのは、この辺に理由がありそうである。もちろんその前にチキが同じ町で結婚し、すぐ実家に戻って来ているというのも、もう一つの大きな理由にはちがいない。開業なつたばかりの熊本の大江女学校で一年間勉強して来たことも考えられる。なぜなら同志社女学校を普通なら五年かかるのに、チキは四年で卒業しているから。ともかく一八八八年にチキは同志社女学校に入学する。入学早々いろいろのことがあった。デントンがアメリカから来たこと、女学校創立十周年記念式典があったこと、金森通

倫から受洗したこと等、それに勉強もずいぶん厳しかった。(一学期末に二科目落第したものの五名に退学が命じられた。一明治二十二年一月七日付大沢善助書簡による)

女学校はその年、多いに隆盛であった。生徒数一八五名を数えたが、その二年後、新島襄の永眠と「教育勸語の発布」で生徒数が、ガタ減りに減ったという。その時、教頭松浦政泰がその経営困難を引き受けて苦勞したことは美談として残っている。後に、チキが彼のことを「学校の経費を少なくするため寄宿舎に住んでおられました。先生は教頭というお役目でしたが実際は事務員のすることまでしておいででした。」と、ある座談会の席で言っているのは、彼から少なからず精神的影響を受けたことを物語っている。同じ席で新島襄のことを「在学中あまりお姿を見ませんでした。」とより語っていないのと比べておもしろい。

本課を卒業する年に、新らしく二年の専門課程ができて、チキはその文学部甲組というところに籍をおく。ここで初めて、チキは、フェリスを卒業して来た松田道に会い、共に机を並べて勉強しはじめるが、道はその一年

後に、アメリカへ留学し、その後、チキは他の二名の同級生と勉強を続けたのかどうか、その所はよくわからない。わかつているのは、いつの間にか普通部の英語教師になっていることで、それも何年やったのかは判然としない。

◇ 結婚生活

一九〇四年四月七日に、知亀は(このあたりからこの字を用いる)東京で長谷場純孝と結婚するが、その前にすでに東京に出ており虎の門にある東京女学館の英語教師をしている。その教え子に長谷場純孝の娘、純がいた。

長谷場純孝は鹿児島県串木重(市)麓の出身(麓とは城の麓であり、薩藩領内の軍事的集落を意味する)で国会開設以来国会議員に連続当選、結婚当時はすでに五十歳、政友会院内総理であった。家庭には最初の妻との間に生まれた前出の娘、純と純孝の継母、五十六歳の志賀があり、知亀は三十四歳であった。翌年、純に婿養子、敦を迎えた時の一家は、女中、車夫をいれて総勢十二名とあるから、知亀は大変なところにいったものである。し

かし長谷場純孝という人は一九〇八年から三年連続で衆議院議長、その翌年から明治天皇崩御の時まで文部大臣、後、再び衆議院議長をつとめるなど政治家としては大人物であったし、知亀もまんざらではなかったかもしれない。その豪荘な官邸で同窓会東京支部会を二度も開いているし、社会主義者にとっては冬の時代の訪れであったその時に、知亀は生涯最良の春の日々を華やかに過したと見るのはいけないだろうか。だが、残念ながら春の日は長く続かなかつた。議会開催中に胸部動脈瘤の再発で純孝は一九一四年三月十五日、渋谷の私邸であえなく死ぬ。その結婚生活はただの十年で、こともできなかつた。その後の知亀の生活は渋谷の広い家の表むきは大黒柱であったが、実は血の通わぬ家族との闘いでもあった。孫が生まれる。死ぬ。また生まれる。姑が死ぬ。その二十二年間に彼女は「人には善意をもって接しなさい。」と後に寮生に教えたその自信の基を築いたにちがいない。その時代の彼女の唯一の楽しみは、あるいは、一年に二回、同窓会東京支部会に出席することであつたのかもしれない。

◇ 寮務主事として

一九三四年の秋、六十四歳の知亀は当時女専の寮であった平安寮の大広間に嬉しそうな顔でびよこんと坐っていた。その前年に松田道と女学校長を交代した片桐哲に聞くと、なぜそこに長谷場知亀が坐っていたのか説明できない。松田道が連れて来たのでは？ ということであった。それには頷けるふしがある。なぜならその六月に松田道は新同窓会長として東京支部会に出席し、知亀と会っているからである。松田道としては辞めた女専のことがいつまでも気がかりであったのかもしれない。殊にその二年前に六十五歳を越えた寮務主事、原トモが辞めているし、その春、生徒主事、荻原芳枝も辞めている。知亀の年齢のことなど問題ではなかったであろう。初代舎監、山本さくは六十七歳から七十三歳まで勤めているということもある。

ともかくも年が明け、翌年四月に知亀は正式に寮務主事という職名を与えられた。

知亀の在職期間中の日本と同志社の歴史を試みに年譜式にあげてみたが、正直いって私はここに書く勇氣がない。日華事変が約元二

六〇〇年祭を通じて大平洋戦争に突入する。女専の学生も教員引率のもとに神社参拝をする。同志社教育の冠であったキリスト教は雲に隠れる。

女専の「寮生活心得」の(一)日華事変前のも(二)大平洋戦争前のも(三)大平洋戦争中のものを比べると大変おもしろい。紙面がないので全部を紹介できないが、服装態度の項だけあげてみる。

(一)で「化粧ハ学生ヲラシク上品ニナスコト」が(二)で「パーマネントウエーヴハカケヌコト、目立ツ化粧ハセヌコト」となり

(三)で「化粧ハ廃シテ自然ノ儘ノ美ヲ尊ビ、頭髮ハ常ニ清潔ニクシケズリ、パーマネントハ絶対ニカケヌコト」となる。

つまり知亀はこういう時代を寮に生きて来たのである。右の寮生活心得という小冊子には日常生活のABCが微に入り細にわたって書かれてあり(たとえば、水道ノ栓ハ固クシメ、広ク水滴ヲ飛バサヌ様ニ、乾キタル洗濯物ハ各自早く取り入レ、履物ハ向キヨ更ヘテヌグコト、過分ノ間食ヲ慎シミ、等)寮生は要するにこれを守れば模範生であるし、守らなくても叱られたらおしまいであ

る。ところが寮務主事となると、いやでも守らなければその資格がないわけで、それだけならよいが、朝は寮生より早く、つまり六時前に起床しなければならぬし、夜は十時、消灯の暗闇の中で、静かに横たわらねばならぬ。これが毎日である。六十五歳を過ぎた老人がこれを守るとするのは、いかにもしんどくてやりきれないと思えるのだが、知亀はそれを、七十七歳の辞める時までやり通したのである。その間、戦争末期でさえも、たとえ実のない形ばかりのものとはいえ寮集会、その他の集会があったし、知亀はそこでもっともな説教をし、寮食堂では三日に一度くらいは夕食前に、歯切れよい祈りを捧げた。知亀にとっては職務に忠実であること、寮生を愛することが即、生き甲斐であったのである。

*

ここで知亀という人物を外観を含めて画きだしてみよう。資料は、十数名のかつての寮生、それにその時代の若い寮務係りからの聞き取りによるものである。

まず良い方では、中肉中背の嬰鑠とした老人、折目正しく端正、威厳と風格、愛情に溺

れず理性的、寝まき姿や乱れた姿を一度も誰にも見せたことがない。ところで悪いのもある。白髪で（黒く染めていたという説もある）猫背、目が鋭く、西洋の魔法使いのようだ。ただしこの方には但し書きがある。魔法使いにも慈愛がある、と。

かつての寮務係りであった人々（仮にA・Bと呼ぶ）の話がまずおもしろい。消灯時間に親スイッチを消すのを、Aは、つい寮生の身になって、一分や二分遅らせてしまう。すると翌朝必ず、知亀に言われる。「昨夜、一分遅れましたね。」そう言われまいとAはある夜一分早く消す。今度は翌朝「昨夜は一分早いでしたよ。」と言われる。知亀は正式就任から二年目、全寮の表玄関である西常盤寮に移っている。（その居室は現在の学寮事務室）そこから毎夜、消灯したあと、他寮を一わたり眺めていたのであろう。これは知亀の意地悪ととってはならない。職務忠実ととるべきであらう。

知亀の、夫と過した華やかな時代の名残りにベット生活とお茶の時間があつた。寮生はベットを使えないのに、知亀は平気でベットを室に備えていたし、毎日、三時になる

と、パーコレータでコーヒーを沸かした。しかし、これにはBや寮生がかわるがわる招はれてご馳走になれたのでありがたかつたとBは言う。そういう時の知亀は、廊下を走ったといつては叱り、門限に遅れたといつては叱る平素の知亀とは違い、気嫌よく、いろいろの話をした。その中の一つにこんな予言があつたという。「もう二・三十年もすれば、誰でもきつと飛行機で、どこにでも行けますよ。」と。聞く方ではまさかとポカンとしていたという。日華事変前のことである。寮生が叱られた話は山とあるが、ユーモアある叱り方もあつたことだけ一つあげておく。ある暑い夏の夜、窓を開けたまま寝ていた寮生が「ごろぼうぐ」という声に驚いて飛び起きると、知亀が障子を開けてそこに立っていたというのである。

寮務係りも寮生も頭があがらなかつたことを、一つあげよう。それは知亀の英会話である。デントンと道端でペラペラ話しているのは始終であつたし、デントンが外人客を寮食堂に連れて来たりすると、そのテーブルに行つて、そつなく英語で応対している。寮生が感心すると、昔はみんな英語で勉強したので

すよ、と得意気であつたという。

戦争末期のわびしさ。叱る相手もかわるがわる軍需工場に出かけてしまう。コーヒーも飲めない。週一度の茶道、華道の稽古をせめてもの慰めとして、ひっそりと、それでも僅かの寮生でもいれば、決して軽々しくはふるまえず暮しているところへ、さきに北京に行つていた松田道が帰国して同窓会館に住みつくことになる。松田道七十七歳、知亀七十四歳。二人の旧友は再会をよろこび、それから毎日二人でささやかな番茶の時間を楽しむ。やがて、八月十五日。

この日、登校していたものは栄光館前で、例の放送を、何かはつきりとわからぬままに涙を流して聞いたという。夜になると、暗幕なしに電灯をつけられたというよろこびと興奮は抑えようもなく、西常盤寮では寮生が二階の一室に集まつて、勉強もそつちのけでしゃべっていた。その内容は、早速アメリカのことであつたり英会話の必要性であつたり、さすがは若者らしい。その時、知亀が二階にあがつて来たのである。障子をガラリと開ける。口をついて出た言葉はこうであつた。「あなたたちは今日を何の日だと思つている

のですか。日本のお葬式の日ですよ。それなのにこんな騒いでいいのですか。」お葬式の日だというのは、日本が完全に敗けたというところをえ方をしていたのだと思う。そうとらえることのできなかった人々の多かつた中で世間とは殆んど没交渉であつたはずの知亀の感受性の鋭さには打たれる。

学校はそれから長く閉ざされる。人の通らない校庭、音のない寮、貧しい食事、どんなにやりきれなかつたであろう。心から知亀を迎えてくれる家庭があれば、この時で知亀は辞めて帰つたのではないだろうか。東京から串木野に引揚げていた養嗣子夫妻は知亀のことをどう思っていたのであろう。よく耐えたものである。しかし、満七十七歳を前にして知亀は今ももう串木野に帰るしか他にどうしようもない自分であることを悲しくも悟つたのである。一九四七年六月のある夜、寮ではささやかな送別会が開かれた。寮生に、何かやってほしいとせがまれると知亀は「グルグルポッポー」と山鳩の啼き声をまねして寮生を喜ばせた。それを思い出して当時の一寮生は言う。「おさびしい先生が、夜ごと、御所から聞えてくるあの山鳩の声を日々の友とし

て聞いておられたかと思うと、しんみりしてしまいました。」

◇ その 後

串木野に帰ると、半年ばかりで義娘、純が死んだ。孫の正子もとくの昔に死んでいるし間もなく養子敦が迎えた後妻との三人、何ともさびしい日々であつた。時折、串木野教会に行つたが、敦はそれをよろこばなかつた。一九五七年四月二十七日、知亀は脳溢血で急死する。教会で葬式をと生前頼んでおいたのにそれは聞かれず、まことにまことにまずしい仏式の葬式であつた。その時のことを串木野教会の一人の老婆はよくおぼえていて、今でも情けながつているという。知亀、八十七歳であつた。二年後、その敦も死んでいる。その墓は木で作られたまま、ばかに立派な純孝の石碑のそばで、今は俗名か戒名かもあきらかに見えぬほど朽ち果てているという。十年前に、串木野駅前郷土の人々の手で長谷場純孝の胸像がたてられ、今はそれが「観光のしおり」にまで出ていることと考えあわせて、ただ胸が痛い。

(昭和二年・女学生)

校友会からのお願い

校友会名簿は一九六五年刊行されましたが、その後、新会員の追加および会員の異動により、今年末、新版の刊行をめざして校友会名簿委員会(委員長・川北貞一氏)にて現在、編集作業に全力をあげています。

何分十万人をこえる大世帯の会員名簿だけに作業は困難をとめない、とくに莫大なる費用を要するために、ひろく広告を募集しております。

皆様の御協力をお願いいたします。

形態 B5判

料金 全頁 三〇、〇〇〇円

½頁 一五、〇〇〇円

¼頁 七、五〇〇円

期限 八月末

なお詳細は校友会本部(TEL 二三一―二六三六番)へ御問合せください。